

# 上野の杜の 波瀾 万丈

## 第十五回

### 東京音楽学校邦楽科への長い道のり 後篇 橋本久美子

日本には「音楽らしき音楽なし」「進歩の点よりみれば甚だ幼稚」——。  
邦楽に対する無理解を超えて邦楽科は、本科邦楽部に昇格して敗戦を迎えた。

#### 奉祝行事や御前演奏の 看板となる

邦楽科の一回生は、東は千葉から西は岡山まで、男子五名、女子十二名の計十七名であった。教授に長唄の稀音家六四郎と吉住小三郎、観世流能楽の観世左近、講師に生田流箏曲の宮城道雄、山田流箏曲中能島欣一、喜多流能楽の喜多六平多、宝生流能楽の寶生重英を迎え、さらに教務嘱託二一名が選科生二四六名を教えた。選科邦楽は、能楽九七名(男子六二、女子三五)、長唄九〇名、箏曲五九名である。昭和十一(一九三〇)年度生は観世流の浅見重信、本学名誉教授となった長唄の西垣勇藏、生田流の塚越清子、鈴木嘉代子等、戦中戦後にわたり長く活躍した。選科生名簿には、当時二十歳の東京帝大生で、のちに本学音楽学部楽理科教授、名誉教授となり、九十五歳まで現役の能楽研究者であった横道萬里雄※、雅楽の家に生まれ長唄三味線に進んだ多忠清の名前もある。選科は志ある者を広く受け入れるとの方針で、大量の

生徒を受け入れた。

本家本元が日本にある邦楽は、奉祝行事や御前演奏の看板となり、演奏会を催せば名流の舞台で評判となった。十一年十二月四日の名古屋公演は「邦楽の豪華版—音楽学校四教授も来名」と宮城、観世、稀音家、吉住の写真入りで「当日は定めて盛況を呈するであらう」(大阪朝日新聞名古屋版 昭和十一年十月二十八日)、翌々日の三重県公演は「邦楽の権威を集め大演奏会の幕」参加生徒全部で百三十九名「聴衆は実に二千余名」(伊勢新聞昭和十二年十二月五日)と喧伝された。

わずか十七名の邦楽科だが、演奏会には選科生が大量に加わり出演者は百名を越えた。お家芸ゆえ選科生の上達も速かったのだろう。

#### 賛否分かれる 帝国議会での議論

では、世間は邦楽教育をどのように考えていたのだろうか。邦楽については帝国議会でも議論されたことがある。大正五年二月、松

山選出の弁護士高野金重が「邦人に趣味なき洋楽より寧ろ本邦固有のものを教授せよと云ふ建議」を行った。小山谷蔵政府委員は日本には「音楽らしき音楽なしと思ひます」「三味線箏曲は西洋の音楽に比して進歩の点よりみれば甚だ幼稚」という。好対照は常陸選出の相島勘次郎で、「私は西洋の音楽を聞いては分かりもしないが浮れもしない矢張日本の「カッポレ」を聞けば面白く氣も浮く」ので、音楽学校で邦楽も教えよと主張した。

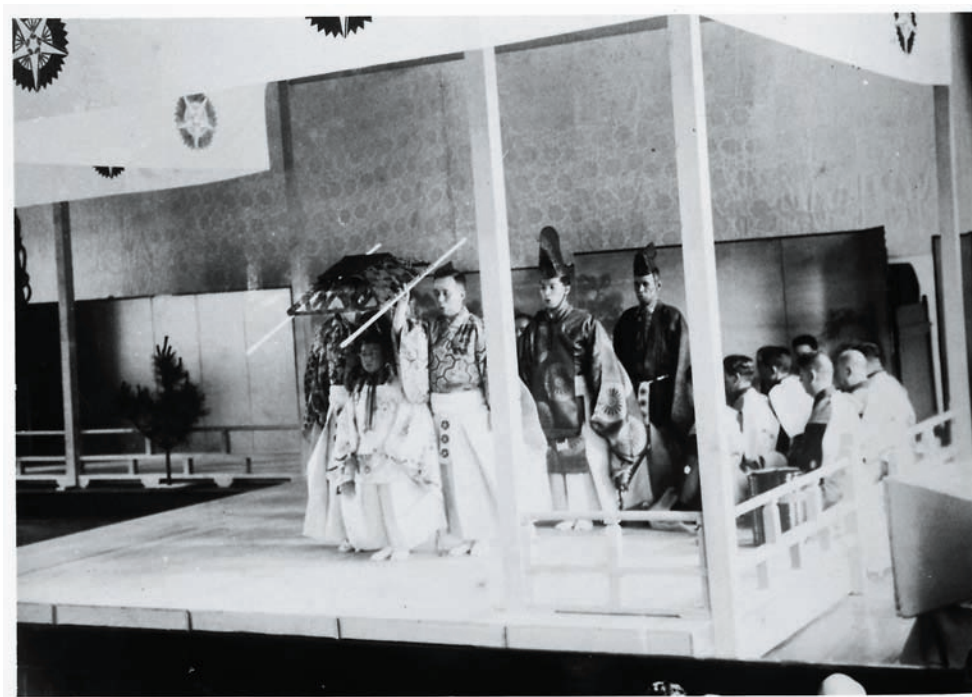
大正八(一九一九)年三月十七日付「官報」に「音楽学校設置二関スル建議案委員會議録」がある。明治大学総長も務めた法学博士鶴澤總明が、関西に国立の音楽学校を新設せよとの提言を行い、日本に大文豪、大詩人が育たないのは音楽教育の欠乏にあり、一万人、三万人の公衆の一致を図るため、洋楽に力を入れたいという。対する大阪出身の実業家金澤仁作は、日本の国民性を帯びている音楽を保存せずには改善もできない、と新設校での邦楽教授を主張。

松浦鎮次郎政府委員は、邦楽では「教ヘル

先生ガ一種ノ師匠ト云フヤウナデアリマスカラ、ソレヲ直クニ音楽学校ノ教授ニスルト云フ訳ニ行キマセズ」と、家元制度と学校制度との齟齬を指摘する。建議案は「政府ハ速ヤカニ大阪又ハ京都ニ音楽学校ヲ設置シテ殊ニ洋楽ノ教育ヲ盛ナラシメムコトヲ望ム」の傍線部分を「斯道ノ教育」と修正された。が、戦前の関西に官立音楽学校が設立されることはなかった。

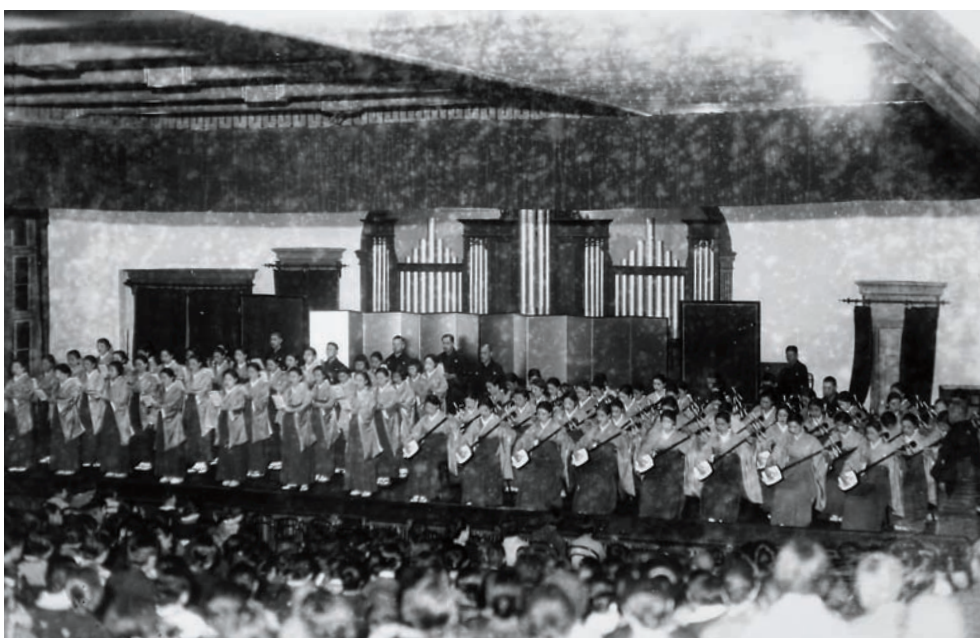
#### 戦後の喪失感と価値観の 転覆の中で

東京音楽学校の邦楽演奏会は、従来は床に座って弾いた箏や三味線を椅子に腰掛けて弾き、唄は西洋式合唱のように立って唱うスタイルも生み出した。折しも国威発揚の時代である。紀元二千六百年記念には同校の教師はこぞって作歌作曲を行った。乗杉校長が自ら作歌を行った邦楽に、山田流箏曲《聖戦讃歌》(中能島欣一作曲)、長唄《皇軍必勝》(吉住小三郎・稀音家六四郎作曲)、生田流箏曲《東



軍の黎明（宮城道雄作曲）、長唄《九軍神讃歌―誉の若桜》（稀音家六治作曲）などがあり、一部はSP盤に録音されている。  
邦楽科は昭和十八（一九四三）年に本科邦楽部に昇格し、敗戦を迎える。  
戦後の喪失感と価値観の転覆の中で新制大学への構想が練られていく。乗杉退任後、校長は国際法学者で吉田茂内閣の文部大臣

も務めた田中耕太郎（事務取扱）、次に漱石門下で独文学者、文芸評論家の小宮豊隆へと替わる。邦楽科廃止の方針は早々に持ち上がり、小宮が職を賭して邦楽科廃止に動いた。学校を揺るがす議論は邦楽科教員総辞職に発展し、GHQの力添えで東京藝大邦楽科が誕生するのだが、この波瀾万丈はまた機会をあらためよう。



次号予告  
「美校の作品展示施設」

吉田千鶴子

※横道氏（大正五年十月十二日〜平成二十四年六月二十日）の訃報が前編入稿後の八月半ばに入った。（はしもと・くみこ）／総合芸術アーカイブセンター  
大学史料室特任助教・音楽学部非常勤講師



上：昭和5年6月21日 皇太后陛下行啓演奏会 寶生流能楽（簫） 出演：寶生英雄、武田喜永、寶生新 東京音楽学校奏楽堂

中：昭和11年11月7日 邦楽演奏会 東京音楽学校奏楽堂 中内蝶二作詞、吉住小三郎・稀音家六四郎作曲 長唄《都の榮》 出演：吉住小三郎、稀音家六四郎、邦楽科及選科職員生徒約百名

下：昭和14年10月21日 芸術学会出席者招待演奏会 中能島欣一作曲《三絃協奏曲》三絃：中能島欣一 管絃楽：職員生徒